

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02360

研究課題名(和文) プロテスト文学としてのアメリカ大衆詩 19世紀の社会悪とそれに抗う詩人たちの声

研究課題名(英文) Popular Poetry as Protest Literature: The Voice against the Social Vice of 19th-century America

研究代表者

澤入 要仁 (SAWAIRI, Yoji)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：20261539

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀前半のアメリカでは社会改革運動が盛り上がり、大衆詩人たちも加勢してプロテストの声をあげた。けれどもそれらの詩を分析したところ、けっして叛逆の歌ではないことが分かった。扇情的でも露悪的でもない。それらは正義を信じる声であり、勇気を鼓舞する詩であった。たとえばローウェルの女工たちのストライキの詩も、建国の父祖たちの理念や勇気を引きよせようとする歌だった。自由土地運動の詩も、政府や地主を糾弾したのではなく、神の認めた権利として土地を求めていた。これは、アメリカ社会がまだ階層化されず分断のない社会と見なされていて、運動家たちがその均質社会の内部から改革の声をあげていたことを示す。

研究成果の概要(英文)：The America of the first half of the 19th century witnessed the upsurge of social reform movements, to which popular poets immediately responded. They vocalized their support, helping strengthen solidarity and encourage activists to pursue their ideals. Analyzing their works, however, this study demonstrates that these poems were far from being rebellious; instead, they advocated righteousness and urged bravery, without being inflammatory. For example, factory girls at Lowell, Massachusetts, composed poems upon a strike against a wage reduction, but these songs were an attempt to gather bravery by comparing their struggle to that of the Founding Fathers. The poems promoting the free soil movement also tried to help factory workers obtain some land as a natural right authorized by God; they did not denounce the government for monopoly.

In America there was no social hierarchy visible even to poets, and they sang from within what seemed a homogeneous society, not as outsiders.

研究分野：アメリカ詩

キーワード：アメリカ大衆詩 プロテスト文学 Lowell, Massachusetts Duganne, A. J. H. 社会改革運動 労働運動 自由土地運動

1. 研究開始当初の背景

アメリカ文学史のなかで 19 世紀前半は詩の時代だったといっている。たとえば Lydia Huntley Sigourney らの女性詩人が無数の詩作を発表し、広範な読者を獲得していた。Henry Wadsworth Longfellow ら炉辺詩人が、知識人から崇敬され、大衆から敬愛されていた。

この 19 世紀中期は同時に、様々な社会改革運動が昂揚した時代だった。その代表が奴隷制廃止運動である。それは大きな政治問題と化して国家を二分し、あげくのはてにはアメリカ史上最大の流血をともなう南北戦争をみちびいた。奴隷制廃止運動だけではない。早くも 1830 年代には、紡績繊維工場の女工たちが労働条件の改善を求めてストライキを起こしていた。禁酒運動も、長年ひとつの風紀矯正運動として続いたのち 1830 年代から盛り返し、数千の禁酒協会を生み、禁酒党という政党まで設立(1869)させた。女性権利運動は、1848 年に開催された女性権利会議によって組織化され、参政権獲得をひとつの旗印にかかげて展開された。

興味ぶかいことに、詩人たちもこの改革運動に共鳴して声を上げていた。たとえば Walt Whitman は、当初こそ奴隷制問題から距離を置いていたものの、*Leaves of Grass* 出版の 5 年前、自身初の自由詩“Blood-Money”を発表し、南部との妥協を求めた Daniel Webster を裏切者ユダにたとえた。

Whitman だけではない。現在では忘れられがちな大衆詩人たちもプロテストの詩を書いていた。たとえば John Greenleaf Whittier による反奴隷制の詩をはじめとして、Lucy Larcom による労働改革運動の詩、Harriet Hansen Robinson による参政権運動の詩などである。これら有名無名の詩人たちの作品は新聞や雑誌に発表され詞華集に編まれることによって、社会運動を煽るとともに、それを政治運動へと牽引したのである。

ところで、19 世紀アメリカの大衆詩は、これまでしばしばセンチメンタルで教訓的な作品ばかりとみなされ、本格的な研究が少なかった。現代でも、Paula Bernat Bennett らの女性詩人研究を中心として、Faith Barrett による南北戦争詩研究や、Angela Sorby による「教室詩人」研究などがみられるのみだ。

一方、19 世紀の社会改革運動やそれにもとづく政治運動に関する研究は、多くの研究が蓄積されていて圧倒的ですからある。近年の研究だけを考えても、Carol Faulkner による 19 世紀の女性運動研究(2013)、Henry Mayer による奴隷解放運動研究(2008)、文学文化史家 David S. Reynolds によるジャクソニアン・デモクラシー時代の改革文化研究(2009)などが挙げられる。

けれども、社会改革運動と大衆詩の関係を探った研究となると、きわめて限られる。Whitman の禁酒小説 *Franklin Evans* などを考察した研究は多いが、さらに広く読まれた大

衆詩は等閑視されてきたからだ。わずかに Jean Fagan Yellin や Lyde Cullen Sizer による研究(1989; 2000)が、女性大衆詩人たちの歌った反奴隷制の詩を論じ、労働運動史家 Philip S. Foner が労働運動の歌を集めているくらいである。

2. 研究の目的

社会改革運動は多くの大衆詩を生み出した。それらは運動の士気を高め、参加者の連帯感を増幅させた。そこで本研究は、社会改革運動と関わる大衆詩を以下の観点から考察することを目的とした。

まず Lucy Larcon や John Greenleaf Whittier ら有名無名の大衆詩人たちによるプロテスト作品を掘り出し、それらがどのような史実や状況に基づいて、何の問題について、どのように描写し、何を訴えているのか等を、その成立の背景を視野に入れながら考察する。

第二に、それらの大衆詩が文字テキストを超えて、どのような形態(活字、朗唱、歌曲など)で消費され受容されているのか、そしてその結果、19 世紀のアメリカ社会の中で、読者個人や社会全体に対して、どのような機能を果たしたのか、を明らかにすることである。このように本研究は、申請者のこれまでの大衆詩研究を補完し、大衆詩の果たした社会的・政治的役割をより包括的に論じる研究へと進展させることを目的とした。

以上のような目的は本研究を次のように特徴づけることとなる。奴隷制廃止を訴えた Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* などのような小説でもなく、多数派政治に抵抗した Henry David Thoreau の *Civil Disobedience* などのような評論でもなく、これまで軽視されてきた大衆詩人による抵抗文学を取り上げること。しかも、大衆詩の感傷性や教訓性という、よく知られた特徴ではなく、社会運動や政治運動との関わりを探ること。さらに、活字で印刷された大衆詩だけでなく、式典で朗唱された詩や、メロディを付されて歌になった詩、そしてそれらの詩に付されたイラストも含めていること、である。したがって、本研究は、見過ごされやすい分野の見過ごされやすい一面に注目した研究であるだけでなく、さまざまな隣接する文化も探ることによって、アメリカ文化史研究にもなることを意図していた。

3. 研究の方法

本研究は以下のようなステージからなる。

まず、19 世紀中期の社会問題、すなわち奴隷制、労働問題、女性抑圧、アルコール中毒など、を直接あるいは間接的に歌った大衆詩を基礎資料として集める。そのさい、新聞雑誌に掲載されたまま散佚している作品を蒐集しても非効率なので、各種の書誌やコレクションを参照するが、地域や人種、ジェン

ダーのバランスも注意する。

第二に、大衆詩人たちが素材にした具体的な事件や問題を、当時の新聞雑誌の報道や後代の研究を使って調査する。社会問題や事件の詳細が分からないかぎり、詩人たちが何を訴えているか正確に理解できないからである。

第三に、第二で調べた報道や研究と比較対照させることによって、第一で集めた大衆詩テクストに描かれた社会問題とそれに対するプロテストを精緻に分析する。事実や報道と対比することによって詩人の表現の工夫を明らかにする。

第四に、社会改革運動の詩にメロディが付された例を探る。19世紀には詩と歌は互いに重なるところが大きい存在だったからだ。同様に、社会改革運動の詩がイラストレーションによって視覚化された例がないか調査する。当時は木口木版術が次第に精緻になっていった時代だったからである。

そして第五に、大衆詩というメディアが果たした役割を再考する。たとえば大衆詩のパラッドは、原始的なジャーナリズムでもあった。社会悪による悲劇が人々の記憶に残るよう韻文化され、それをいち早く伝えて拡散させたからである。さらに大衆詩は、個人の悲劇を歌うことによって、それを社会で共有し、その結果、個人の悲しみを軽減させる効果もあった。このような大衆詩の果たした役割を再考することによって、プロテスト文学としての大衆詩の意義に新しい光を当てる。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく三種類に分けられる。

(1) 市民によるプロテスト文学といえば、反奴隷制運動や、女性解放運動、労働組合運動のような、従来の体制や因習を破壊しようとする過激な運動を想起しやすい。その運動家たちは、社会のアウトサイダーとして社会の外から社会へ激しい揺さぶりをかける。けれども19世紀前半の社会改革運動の詩はそのような叛逆の詩ではなかった。非暴力的で穏健というだけでなく、もっと理想を求める誇り高いプロテスト運動もあった。それは、同じ社会の一員として同じ社会に訴えかけようとするプロテストだった。

たとえば、アメリカの初期産業革命を代表するマサチューセッツ州ローウェルの紡織工場に働いていた女工たちがいた。彼女たちが詩作を寄稿した『ローウェル寄稿集』*Lowell Offering* という文藝誌が刊行されている。それは19世紀中期のアメリカで活躍した女性詩人・作家ルーシー・ラーコムや、女性参政権運動で活躍したハリエット・ハンソン・ロビンソンを輩出した雑誌だった。

なお、1823年に開業したローウェル紡織工場は、アメリカで初めて綿の紡績と製織を一箇所ですまかなうことができた近代工場だっ

た。アメリカの初期産業革命の代表とっていい。そこには、明治日本の製糸工場と同様、多くの若い女工たちが住み込みで働いていた。その過酷な労働条件は、アメリカ最初期のストライキも招いている。1834年のストライキはほどなく鎮圧されたが、15%の減給に対して立ち上がったものだった。宿舍代の値上げに抗議してはじまった1836年のストライキは、多くの参加者を集め、値上げを撤回させることに成功した。1845年には、労働時間を10時間に短縮するよう嘆願する争議もあった。

けれども『ローウェル寄稿集』を閲したところ、経営者を糾弾したり、労働環境の劣悪を告発したりする詩や文章がほとんどなかったことが明らかになった。1845年の争議の記述もけっして扇情的でも露骨的でもなかった。自分たちには神が見守る正義があるという、理想主義の姿勢が貫かれていた。中産階級の女性たちによる作品に聞こえるくらいだ。

『ローウェル寄稿集』を離れ、1834年と1836年に起こったストライキを巡る文献を探してみても、1834年のストライキ時に提出された「嘆願書」へ付された詩などでは、自分たちの行動を建国の祖父たちになぞらえていた。素朴ながらもきわめて高貴な理念が込められていて、読者の情に訴えるというより、読者の理想に訴えかける詩になっていた。資本家による労働者の搾取という図式が固定化されていなかった時代ではあるが、19世紀アメリカのプロテストの原型としてきわめて興味ぶかい。

ローウェルの女工たちの作品は19世紀前半のプロテストとはどういうものであったのかという根本的問題をまず問い直す必要があることを明らかにした。

(2) さらに調査を進めると、ローウェルの『寄稿集』の廃刊(1845)直前、同じくマサチューセッツ州フィッチバーグで発刊された週間労働新聞『産業の声』*Voice of Industry*, 1845-48にはプロテストの詩や歌が掲載されていることがわかった。たとえば、現在では炉辺詩人と呼ばれ、反奴隷制の詩やニュートンランドの自然や生活を歌ったことで知られるホイットニア John Greenleaf Whittier が詩を寄稿し、詩「靴職人」“The Shoemakers”では靴職人の守護神・聖クリスピヌスの祝日に職人たちが連帯するよう訴えた。ホイットニアはのちにそれらの詩を『労働の歌、その他の詩』*Songs of Labor and Other Poems*, 1850にまとめていた。また後にハーヴァード大学教授にもなり、批評詩 *A Fable for Critics* でもっともよく知られるローウェル James Russell Lowell も詩を提供し、「声をあげる」“Speak Out”では正義の声を発する勇気を説いていた。このように当代のアメリカを代表する詩人が寄稿していたのである。

それだけではない。この新聞はまもなく上記ローウェルへ拠点を移し、ローウェル女性

労働改革組合が編集を担当するようになり、女性工員たちの抗議の詩文も掲載されるようになった。この変化は、労働問題がいつそう深刻化したことを示すだけでなく、組織化によって労働者の発言力が強くなると同時に多くの同調者を集めたことを示している。それに貢献したのが、当時の文壇を代表していた詩人たちであった。

(3)週間労働新聞『産業の声』*Voice of Industry*を引き続き研究すると、ダガン Augustine Joseph Hickey Duganne という、現在では忘れられているプロテスト詩人が 1840 年代に活躍していたことが明らかになった。

そこで、1840 年代のアメリカ社会をあらためて振りかえり、いかに社会改革運動がさかんな時代だったことをまず確認した。禁酒運動（たとえば 1840 年のワシントン禁酒協会、ホイットマンの禁酒小説 *Franklin Evans*, 1842）、女性権利運動（1848 年のセネカ・フォールズ会議）、ユートピア運動（ブルック・ファーム、ファランクス、フルーツランズ、ベセル・コミュニティ、オナイダ・コミュニティ）などである。もちろん奴隷解放運動（たとえば 1845 年のダグラスの半生記）も大きなうねりが続いていた。

それらの社会改革運動の中で、自由土地運動 free soil movement は誤解を招きやすい運動である。現在、自由土地運動というと、1848 年に設立され、新しい準州への奴隷制拡大に反対した自由土地党 Free-Soil Party の運動と思われがちだが、1844 年に設立された全米土地改革協会 National Reform Association の運動があったからである。それは、東部の工場労働者たちに西部の土地を無償で開放しようという運動だった。産業化と都市化を背景にした賃金労働という隷属状態に対する反発であり、人種を越えた自由を求める運動であった。

この自由土地運動の代弁者となったのがダガンだった。現在ほとんど論じられることが少ない詩人のため、その伝記は不明なところも多く、じっさい誤伝も多いことがわかった。けれども生前から「労働の詩人」と呼ばれ、その作品は 19 世紀末になっても歌われていた。

そこでダガンの思想や詩作を分析した。ダガンによれば、聖書の創世記などにみられる労働は労苦だった。けれどもそれは「労働という呪い」the Curse of Toil である。真の労働とは「神の祝福」Blessing だ、「人間の真の魂を喝采」するものだ、という。さらに、労働は自由と同一であって、労働を求める道が自由を求める道と重なる、と唱えた。ダガンはそのような労働を実現する場として土地を求めたのである。「土地のない人々」the Landless が「うめき」「のたうつ」様を描き、神の自己定義が「有りて在る者」という問答無用の定義であるように、労働者の土地獲得は問答無用の当然の権利である、と訴えた。

たしかに、その詩作は素朴で単純だ。けれ

ども、農具や機械を「鉄の豎琴」iron harp ととらえ、それらが響き合う硬質の音が労働者の歌を盛りあげる、と歌っているところなどは、ホイットマンが詩「アメリカの歌声が聞こえる」の中で労働者たちが歌う「さまざまな讃歌」を描いていたところを思いおこさせる。それは非音楽的な音だが、逆にそこから硬い意志が伝わってくるのである。20 世紀の公民権運動や反戦運動にフォーク・ソングが貢献したように、19 世紀の労働運動ではダガンのような詩人の作品が労働者の士気を高めたのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

澤入要仁，謎かけの効用 エミリー・ディキンソンと鉄道，比較文学研究，査読無（悠憑），101 号，2016，171-180．

Yoji Sawairi, Hiraishi Noriko. *Hanmon seinen to jogakusei no bungakushi: 'Seiyō' o yomikaete* (Anguished Youths and Girl Students in Modern Japan: Reinterpreting Western Literature), Tokyo: Shinyōsha, 2012, 比較文学，査読無（悠憑），58 巻，2015，215-214．

〔学会発表〕(計 1 件)

澤入要仁，プロテストの声 Augustine Joseph Hickey Duganne と詩人の使命，日本アメリカ文学会東京支部，2017．

〔図書〕(計 1 件)

亀井俊介監修，杉山直子・澤入要仁・荒木純子・渡邊真由美 著，アメリカ文化年表 文化・歴史・政治・経済，南雲堂，2018，（印刷中）。

6. 研究組織

(1)研究代表者

澤入 要仁 (SAWAIRI, Yoji)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：20261539